

IV 下伊那地方の無袖式横穴式石室と樋明古墳

1 下伊那地方の横穴式石室（第6図・第1表）

当地方における横穴式石室については、今までにいくつかの研究がなされている。（参考文献参照）横穴式石室の導入は6世紀前半とされている。無袖・片袖・両袖の3タイプがあり、そのうち無袖式は当地方では最も一般的なものである。現在16例が確認できる。（樋明古墳を除く）

特徴

- ① 石室底部平面形は、開口部から奥壁に向かって広がる縦長の台形状を呈する。
- ② 平面形・側壁の積み方による玄室・羨道の区別はないが、天井石の残るものを見ると、天井石を一段下げることで、両者を区別していたものと思われる。
- ③ 側壁は、基本的には1～1.5m程の花崗岩自然石を不規則に三段以上積み上げることによって構成されており、すきまには径50cmから握りこぶし大の石が詰められる。
- ④ 持ち送りが見られ、奥壁は見かけ上台形となる。
- ⑤ 石室の全長は、およそ5m以下のものと7m以上のものとの2つに分けられる。高さは、全長の長いものは比較的天井も高いという傾向がある。幅は、全長の长短にかかわらず、奥壁付近で平均2m前後となる。
- ⑥ 円墳、前方後円墳ともにその例があり、前方後円墳の場合には、おかん塚古墳・馬背塚古墳のように一古墳二主体部のうちの一つとして用いられる例がある。

問題点

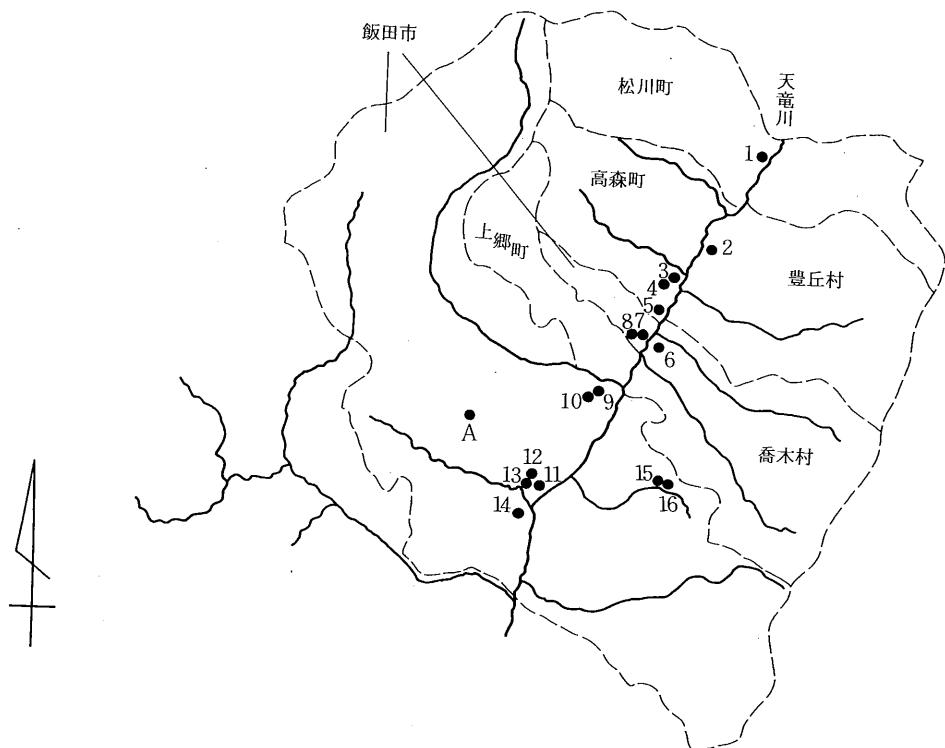
① 石室構造について

基本的には1～1.5m前後の大型の石を横積みするが、積み上げ方には一定の規則性は認められない。（下辻古墳は全体にやや小振りの石を用い、塚穴1号古墳は側壁の下半分には大型の石、上半分には小型の石を用いて構築されているが、これらは特殊なものではなく、入手し得た石材の大小、立地上の制約などによるものであろう。）松尾論文では側壁の腰石（最下段の石）の規模の変化が問題とされているが、石室規模の大きいものほど大きさのそろった大型の石が使われているという傾向はある。この石室規模の拡大は無袖式の場合、幅にほとんど変化がなく、全長の延長によってなされるのが特徴である。

無袖式石室は、墳丘規模の大小の差異に起因するとすれば、石室規模も時間差の中で捉えられる可能性は否定できないが、基本的構造という点ではほとんど時間的変化は認め難いといえる。

② 石室のあり方について

前述のように、下伊那地方には一つの古墳で二つの石室を有するものが存在する。（おかん塚古墳・馬背塚古墳）主体部の一つが無袖式石室で、もう一方が白石論文によるところの畿内の横穴式石室の影響を受けた両袖式石室である。この論文で、馬背塚古墳の例をあげて、前方後円墳における後円部の優位性から後円部石室が前方部石室に先行することを指摘し、編年の示標としており、おかん塚古墳では前方部が消失し、現状での検証困難な点はあるが同様といえる。いずれにせよ、無袖式のみ、両袖式のみを有する円墳または前方後円墳、両者を有する前方後円墳という、墳形と石室の関係から無袖式石室の性格を考える上で、二つの石室を有する古墳の存在は重要である。



- | | | | |
|------------|------------|------------|------------|
| 1. 屋敷添古墳 | 2. 家の上古墳 | 3. 北林2号古墳 | 4. 金部1号古墳 |
| 5. 武陵地古墳 | 6. 郭1号古墳 | 7. 石塚1号古墳 | 8. 石塚2号古墳 |
| 9. 上溝天神塚古墳 | 10. おかん塚古墳 | 11. 金山1号古墳 | 12. 馬背塚古墳 |
| 13. 御猿堂古墳 | 14. 下辻古墳 | 15. 塚穴1号古墳 | 16. 塚穴2号古墳 |
| A. 権明古墳 | | | |

第6図 下伊那地方の無袖式横穴式石室分布図

古 墳 名	所 在 地	形態	規 模	石 室				備 考
				全 長	幅	奥 入口	高 さ	
屋敷古墳 家の上古墳	下伊那郡松川町 ”	円 円	10.7～14.0+ 17.0～18.5+	4.63+	2.0	1.6	1.55	
北林2号古墳	豊丘村 高森町	円 円	12.7 20	8.8 7.12+	2.1	1.3	—	
金部1号古墳	”	円	4.55+	2.0	1.5	1.2	1.64	
武陵地古墳	”	円	16.9	9.09+	2.15	1.15	2.9	
郭1号古墳	”	方円	—	11.25+	2.3	1.6	2.75(1.3)	後円部
石塚1号古墳	飯田市座光寺	円	21.8	8.5+	2.5	1.7	2.5	
石塚2号古墳	”	円	32.7～22.7	8.75+	2.51	1.88	2.25	
上溝天神塚古墳	松尾	方円	60	10.7+	2.1	1.6	1.8+(1.1+)	後円部
おかん塚古墳	”	方円	41.8	3.1+	1.3	1.4	1.8	前方部
金山1号古墳	上川路	方円	推定63	3.64+	1.21	0.76	—	後円部?
馬背塚古墳	”	方円	46.4	11.7	1.9	2.7	1.8(1.4)	後円部
御猿堂古墳	”	方円	66	12.95	2.3	2.15	2.85(2.1)	後円部
下辻古墳	川路	円	11.8+	8.8+	2.2	1.5	2.65	
塚穴1号古墳	”	円	推定20	7.0	1.92	1.74	3.15	
塚穴2号古墳	上久堅	円	—	2.9+	1.72	—	—	

(単位m)

注: 本表は、『下伊那史』第二巻、松尾他「飯田市周辺における前方後円墳の実測調査」を基に作成

+は破壊による現状での値であることを示す。

高さは最高値、()内は天井石が一段低くなっている箇所での値

第1表 下伊那地方の無袖式横六式石室

③ 石室形態の把握について

現状で16例ある無袖式横穴式石室について、最も基本的な問題として、その形態の把握に関して一考を要する。それは、羨道部形態の把握についてであるが、現在開口している石室の多くは、閉塞石もしくは、土砂等により入口部分の石室底部形態の把握が困難なものが多く、また、その部分の欠失した可能性の高いものもあり、片袖式である可能性を否定できないものがある。今後の清掃調査等により新事実の指摘される可能性がある。

2 樋明古墳の石室と古墳の位置付け

本古墳の石室は、規模の上では7m以上の大規模のグループに入る。側壁の上半分が破壊されているため、他と比較しにくいが、規模的には塚穴1号古墳に比較的近いようである。典型的な無袖式横穴式石室の一例といえよう。また、第5図の分布図をみると他形態の内部主体をもつ古墳の集中する天竜川流域を主に無袖式横穴式石室も分布している。一方、本古墳および天竜川をはさみ標高700m近い上久堅塚穴古墳など、当時、地域の中心から若干離れた感のある地区においても無袖式横穴式石室を用いている。この事は、古墳時代後期のある段階において、当地方の石室形態が統一された姿が強く推察される。

樋明古墳の石室は、かなり破壊が進行しており、不明瞭な点もあるが、西部山麓地域における最初の横穴式石室の調査例であり、その形態が無袖式であるという事実を把握し得たことは、今後の地域全体における横穴式石室の、さらには古墳文化の研究に大きな一石を投ずるものといえる。

参考文献

- 1 市村咸人『下伊那史』第二巻・第三巻 1955年
- 2 長野県史刊行会『長野県史』全1巻(3)－主要遺跡(南信) 1983年
- 3 大沢和夫「おかん塚石室発掘の記」伊那14-6 1966年
- 4 松尾昌彦他「飯田市周辺における前方後円墳の実測調査」信濃34-11 1982年
- 5 飯田市教育委員会『塚穴1号・2号古墳』 1987年
- 6 白石太一郎「伊那の横穴式石室」信濃40-7・8 1988年